

# 町民文芸



## 只見短歌会

六月詠草

大塚栄一 指導

耳遠き母の施設の日々思ひ持ちゆく綜が車内に匂ふ  
古川 英子

晴れし日に子らの薯植ゑ手伝へば足のむくみの徐徐にとれゆく  
皆川 恒子

喜びも悲しみとても現世では定めと思ふ雨の夕暮れ  
吉津 政枝

亡き母に仕種の似ると思ひつつ母の歳をとうに超えたり  
馬場 八智

リハビリと言はれ施設に数多きタオルをたたむ気の合ふ友と  
五十嵐 英子

夫一人遺し柩の出でゆかかつてなき如き大雨の降る  
五十嵐 夏美

隣家の蜜蜂群れ飛ぶ異状さに主を呼べば分封するとふ  
渡部 ゆき子

階上る足音を聞き孫帰ると知れば忽ち眠りにつきぬ  
齊藤 ちひろ

遊び疲れ寝入りし孫の握りる指を開けば小さき石出づ  
目黒 富子

朝早く畑に出づる夫の背は逝きて年経し舅に似るも  
渡部 ヨリ子

すずらんは幸福を呼ぶ花言葉と言ひつつ孫ら仕入れる多し  
新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

七月例会

目黒十一 指導

康女

四五人の子供の囲む大毛虫  
日中の暑さ残して夕日落つ

三日目のマリネの小鱈梅雨きざす  
水を売る町に生まれて軒菖蒲

にいにい蟬泣きたきことの二つ三つ  
かんざしとして飾りたき山法師

残雪の尾根晴れ渡る夏至の朝  
トマト畑にはたと止まれり青田風

梅雨寒や軒にはりつく青蛙  
満天星の花の香りや喪の明けて

田水沸く簡易舗装路自転車道  
田水沸く山田や軒につづく道

姪っ子のお産祝いや夏座敷  
辣蕪を漬け終わりたる妻の声

植田なか補植にかがむ越後笠  
売られゆく空家にそそぐ西日かな

百万人つなぐキャンドル麦の秋  
鬼やんま胸に幾匹の幼き日

子雀を拾いし後の遣り場なし  
岩魚棲む淵の暗さや大柱

山蟻の独り歩きの王者ぶり  
蛍にも源氏と平家昔から

一灯

邦男

隆堂

邦夫

吉児

恒夫

修一

礼

一

一

一

一